Sweeping away the darkness
——暁、闇を払う

夏の日差しは眩しすぎる。

コート上で影として振る舞うには光は必要不可欠ではあるけれど、真夏の本物の日差しの強さと来たら如何ともしがたく、それは現在の光である火神も夏生まれだとか関係なくてあーとか、だーとかうだったりしているから太陽は偉大だとそっと日差しを避けようとしてしまうのである。夏は。

しかし、そんな夏の前は梅雨である。気象庁は梅雨入りを発表したものの、『らしい』だけで東京の雨量は少なかった。

「つーか、夏前なのに気温三十度近いってなー」

部長の日向が団扇代わりにしたノートで仰ぎながら息を吐いた。部室は空気が籠もっていて暑くなっていた。窓を開ければ風通しが良いのが救いだが、迂闊にパンなどを放置したら大変なことになりかねない状態だ。

「二号平気か？」

犬は人間とは異なり毛皮を着ており皮膚で体温調節ができず熱中症になりやすい、誰しも飼っているという自覚があるので世話を焼く。伊月の言葉に餌を遣りに行った一年生が頷いた。

「ハイ。あ、でもなんか…」

少し言い淀んでから一年生は首を捻った。新設二年でＷＣ優勝という言葉だけで入部した者からふるい落としていって残った新入生達のうち、三ケ月相田監督のシゴキに耐え抜いた猛者の一人である、素直に、ただバスケが好きで、バスケをするために入ったのに犬に遭遇とはと言いたげに二号と対面したときはきょとんとしていたが、いまや扱いにもすっかり慣れていた。

「あの、黒子先輩は？」

「ここです」

背後から呼び掛けるとぎょっとして振り返る。黒子としては慣れてもいるが、もはや自分に対する他人の対応は驚くことからスタートする。

「二号、餌も残さなかったんですけど…」

言い終わらぬうちに火神がやってくる。

「黒子ー」

パックジュースを手にしながら不本意そうな顔だ。

「二号のやつ、なんか前脚舐めてばっかしてんだけどよ」

「火神くんが見てやればいいじゃないですか」

黒子が応えるとすでにジャージ姿の相手はむっとした顔をし、ぷいっと横を向く。

「スゲー嫌がられたんだよ」

屈辱と言わんばかりで、小金井がぷっと噴き出す。火神は二年になってもテツヤ二号に慣れきれていなかった。犬は接する者の態度を敏感に察し、順位を付ける動物だ。一番を決めると信頼を寄せ、それを一途に守ろうとする。故に、部員のなかでもどうしても及び腰になってしまう彼の位置は下位のままだった。

「脚を触ると怒りましたか？」

「…唸った」

「キャプテン」

黒子は脱ぎかけた制服を着直すと日向を見た。

「すみません、少し部活遅れると思います、もしかしたら治療費が必要になるかも」
「…しょーがねえなー」
「黒子先輩」
話が分からないという顔で後輩が黒子達を交互に見る。声が自分がなにかをしでかしてしまったかとの不安感を滲ませていた。大丈夫です、と言っておく。
「見てきます。穴掘りでもしてガラスに触ったのかも知れません」このところ暑かったですから。
後輩はそれでも分かっていないようだったから補足的な説明は他の誰かがしてくれるだろう、黒子が威嚇する二号の前脚を引き寄せて見ると、なるほど肉球に棘のようなものが刺さっている。ガラスではないようだけれど、容易に抜けそうでもなく、よく見れば腫れてもいた。舐め続けたのは違和感を取り払おうとしていたのだろう、動物はこういうとき、警戒心を強めて丸くなって、治すことに専念する。
「…よく見てますね」
抱き上げて病院に行く。治療費は確かに痛かったけれど、大事な部の一員なので涙を忍んで誰もが財布を軽くした。診療という苦痛に耐えた二号は部員達にことさらに甘やかされてまんざらでもないようだった。
白い包帯は三日もすれば取れるそうだ、火神に追加された命令は『処方された薬をどうにか食後に飲ませてやること』、黒子は抱えた二号の背中を撫でながら教えてやる。
「火神君が気付いたんですよ」
二号はそんなことより危険があるので注意せねばなりません、とでも言いたげに自らが掘った穴を見ていた。
「これでランクが上がらないのが火神君というか」
泣けるような笑えるような話だ。
火神は眩しい光だけれど、同時に、どこでも均等に、その粒をまぶすようになっていた。
より熱を帯びていくのはこれからだ。黒子はそんな光を受けて最強の影になる。

誰が何をどう言ったわけではないけれど、赤司征十郎が小さな危機を感じ取ったのは確かだった。
「〝虫の報せ〟」
「――は？」
そう、きっとそれが一番正しい。
何か思いがけないものが閃光のように目の前というか脳内を上から斜めに突っ切り、〝備えよ〟と信号を発する。沈思黙考した末、赤司は電話を掛けることにした。曖昧ではあったが、疎かにしてはならないと本能が告げている。相手はここから四〇〇キロほど離れたところにいる、手を伸ばして届く距離ではなかった。ボールが落ちたイメージ、運動性がぷつりと途切れ、自分はそれを受け止められなかった。落下する。損なう。失う。
残像に導かれるようにして京都発の新幹線に乗る、東京到着十六時二十七分、赤司はその数十分後には誠凛高校の校門前にいた。携帯電話に着信もメールもないのを確認し、焦れる思いを隠しながら足を体育館に向ける。
「あれ、赤司君？」

「黒子」
「どうしたんですか?」
そらとぼけたように黒子テツヤは言い、胸に抱いた子犬を抱き直す。涼しげな制服からのぞく二の腕が妙に艶めかしく目に映り、自然にまぶたが細まり、その薄い隙間で彼の姿を捉えている。おかしい、彼はそんなヤワではないし、見え方だって儚げでもなく普通のごくありふれた色目でしかなかったはずだ。
「こら、あまり動かない」
「黒子ではないのか」
「…はい?」
黒子はどうにか動こうとして藻掻く子犬と目を合わせるとしょうがないというように地面に降ろす。子犬の脚には包帯が巻いてあった。痛々しい、けれど犬にとっては己を拘束する不愉快な〝何か〟としか認識されないようで黒子はそこに視線を注いだまま、怪我をしまして、と言った。
「二号が」
だから自分ではないと主張するようだった。
「わりと深かったみたいで、梅雨の時季に悪化させるわけにもいかないので病院に連れて行ったんです」
「なるほど」
子犬は危なっかしく前肢を動かしながら黒子の周りを歩く。不自由そうだが支障がないことに犬よりも黒子の方がほっとしているようだった。部員として彼に似たこの犬は飼われている、情は多分にあるのだろう。
「赤司君?」
「……」
ごくわずかな歪みは軋りを生じ、歯車を狂わすこともある。
「掴まないでくれませんか」
「ああ」
言われて手を離した、指のはらで相手の耳下から首筋を辿り、顎のラインを撫でるという筋道は呆気なく断たれる。赤司は見るともなしに相手の肩や腕を触っていたのだ。いつまでもやさしいような印象で首は細いままだけれど、誠凛の監督は彼に過剰な負荷を与えずに筋力をつけさせている、そして異常はどこにもないようだった。
「こっちに用があったんですね」
「連絡をしても返事もなかったものだから」
新幹線に飛び乗ったなどとはとても言えない、あ、と思い出したように黒子は赤司を見る。
「すみません、バッテリー切れてて」
謝るわりにまったく顔は悪びれておらず、寧ろ連絡なんてしてたのかと言いたげだった。
「いや…」
まずはそこか。なんとも彼らしい。
赤司の周囲は携帯電話のバッテリーが切れると生命線が絶たれてしまうのを食い止めるかの勢いで充電の策に走る。それこそ通信は通じなければならず、不通なんてありえないときっと大多数が信じているほどにそれは〝欠かせないもの〟なのだ。もはや誰にとってもツールというよりもチャームくらいではないかと思えるので平然としている彼をつい見てしまう、相手はなかったら不便ではあるが支障はないという様子だ。
「紛う事なく黒子だな」うん。
頷く。だから今回は不便さが招いた事故、ここにきてやっと力が

抜けた気がした。
「?」
たとえば、本がなければ黒子は焦り、ひどく落ち込んでしまうだろう、バニラシェイクがなければ嘆き悲しむだろう、バスケがなければ絶望するかも知れない。彼の感情を大きく揺るがすものはそれこそ厳選された一握りのものだけだ。その中に携帯電話は選ばれたりしない。
「何ですかそれ」
「いや、気を悪くしたのならば謝る」
では自分は。
「……」
目は口ほどにものを言うというが、彼の場合はまさにそれで、大きな瞳をひたと向けられると時々逸らしてしまいたくなってしまう。青峰がそうだった、仲が良かったので胸の内まで読まれてしまうような気になってしまったのだろう。どんな感情も乗せずただ見ているだけとは本人の談だが、視線はある種の感情を乗せ、不躾だったりする方が案外に応じやすいものである。彼のこの視線は明らかにこちらの応えを待っている。
「何と云えばいいのだろう、まずイメージが浮かんだ。不吉な予感のようなものがあったんだ」
黒子はそれは、と返し、赤司を真っ直ぐに見詰めた。
「…やっぱりすみません」
相手の顔は至って変わらないのに慎重げな声は違う、どこか記憶の貯蔵庫からいけないものを引っ張り出してしまったような後悔を滲ませていた。
「赤司君は、記憶力がいいからちょっとした異変を過去の事象とリンクさせるのかも知れません」
「そんなことはないさ」トラウマを抱えやすいみたいに言ってくれるな。
「デリケートどころか図太…、はさておき、それくらいの弱さがあってもいいと思いますけど」
暗にもう一人の自分が凹まされて身の内に沈んだあれをかわいげがあったと言われているようで複雑な気分になる。思わずしたくもない空咳なんかが出てしまった。子犬の声がそれに応じ、赤司に目を合わせる。やはり似ていると認めざるを得ない、決定的な違いは二号は耳を立て、尾を振ってくれるが彼はそんな素振りは一切見せたりしないところだ。
「赤司君、元気ですか?」
「目の前にいるよ、この通りだ」
赤司は黒子を見る。相手はこちらではなく、空を見上げていた。
「…東京は、梅雨なのに雨が降らず、毎日暑いくらいですが、ボクもなんとかやってます」
まるで虚空に書かれた文言でも読み上げるように口にする。詩文の朗読か、あるいは雨乞いの祈りみたいにも見えて赤司はちらりと晴れた空を見遣ってから相手に向ける。やはり彼の視線は赤司にはないままだった。
「ボクは赤司君と同じ風景を見られませんが、見たいと思っています」
「黒…」
伸ばしたくなる手を抑える。少し考えながらというようにゆっくりと、確かな口調で相手は続けた。
「二号は怪我をしてしまいましたが、大したことはありません」

「……」
「気にして貰えたのはちょっと嬉しいですね。じゃあ練習があるので」
子犬はすんすんと鼻を動かし、黒子よりも先に体育館へと歩いて行く、その後を追う黒子は立ち止まったままの赤司を振り返るとメール、打てなかったので、とはじらうように、それでも笑った。
「また会いましょう」
「…ああ」
なんだかまた軽く負けたような気がしている、でも満足だった。残念なことに。
「会場で」

誰が使い始めたのかは知らないけれど『払暁』というのはいい言葉だなと黒子は思う。
万物に等しく降り注がれる光は力強く、始まりを伝える。何処でも誰にでも、どんな状況にあっても。
「黒子」
「……」
待ち合わせの時間よりも早めに来て本を読んでいた。来る前に図書館に寄って借りてきた本だ。日向が熱く語っていたわけではなかったが、今のモチベーションを上げるにはやはり軍記物が相応しいような気がして、館内の掲示に目を通し、データと睨み合い、選別したのち、本棚から引き抜いたのだ。山本周五郎と、白石一郎の短編集、はっきり言って作家に詳しくもないので読み通すつもりではあるけれどアタリかハズレか（作品との相性のことだ）わからない。

――コン。
机を軽くノックされて顔を上げる。
「あ」
黒子はやってきた人物に気付いて会釈をする、時間は五分前、採光の角度のせいか後光が差しているかのようで赤司は私服で、当然のようにチームメイトも一緒だった。眩い光が来ややりました、と胸の内に呟いてみたりする。
「何読んでるの？」
実渕玲央が気軽に声を掛ける。
「歴史物です」
黙って聞いていた葉山小太郎はそんなのが好きなのかとややうんざりしたような顔をした。
「では、オレは時間まで黒子といるから」
赤司は黒子の正面に座るとまるで他を払うように言った。えっと思う。
「冷房は寒くないか？」
ぶるぶると首を横に振る。違う、全く違う。
今年の誠凛はインターハイへの駒までは進められたけれど、力及ばずという結果に終わった。頗る悔しいので、しかも日もまだ浅いためスイッチが上手く切り替えられず、本来ならば会うのも避けたかったのだけれども、やっぱりそれ見たことかみたいに上から視線なんか感じようものなら喉元に痛烈に何かを突きつけてやりたくなるので、…要するに己の性格からして引けなかっただけの話なのだが、赤司の誘いに応じた。洛山チームは夏休みを利用し、練習試合をいくつかこなしてから休みに入るらしい。そんな日程の中のわずか半日の休みに会おうなんて言うからこちらはいわゆる観光スポッ